はしがき

浄土真宗の他力不思議の妙法に遇わしていただいて、大満足の生活をさしていただいていますか。

それとも宗教を聞かない人よりも、不平不満の日暮しをしていますか。現在を抜きにして死んで助かる宗教でしたら、浄土真宗ではありません。平生業成とは、平生の達者な間に往生の一大事の解決がつくということで、精神的の大満足を獲て、現在の肉体的の生活のままで感謝と法悦ができなければ、摂取されたのではありません。精神的の満足を獲たのを真諦門といい、肉体的の活動をさしていただくのを俗諦門というのであって、現在で摂取された者が未来の往生を得らるるから、現当二世の幸福を得るというのですが、現在が晴れて満足していない原因で未来の成仏を望むのは以ての外であります。

ただ死後の往生を夢見て観念の遊戯をしているものは、手前の川を渡らないで向うの川を渡るつもりでいるのですから、枝葉の先から根本に登るよりも難かしいことです。

現在の延長が未来ではありませんか、現在が晴れて満足しないものが、未来の証果は無理であります。現在が正定聚の菩薩の原因を獲てこそ、未来の仏果が獲得できるのです。

あなたは浄土真宗に流れを汲んでおられますが、十劫已来待ちつづけられた親さまに遇われましたか、不思議の誓願の若不生者に生かされましたか、今現在摂取不捨の利益を蒙っていますか、金剛堅固の信心が定まりましたか、往生の一段には不安がなくなりましたか、家庭円満な生活になりましたか、順縁逆縁ともに拝めるようになりましたか、幸福な時は仏祖の鴻恩と感謝し、不幸の時は自己の悪業と懺悔ができますか。

二種深心が徹底し不思議の仏智を諦得すれば、有無を離れた神通自在、無碍自在の境地に立たるるのですよ。

経の成就の文には「諸有の衆生、その名号を聞きて信心歓喜し乃至一念せん、至心に廻向したまえり、彼の国に生れんと願ずれば即ち往生を得、不退転に住せん」

付属の文には「仏彌勒に語りたまわく、其れ彼の仏の名号を聞くことを得るありて、歓喜踊躍し乃至一念せん、当に知るべし、この人大利を得となす、則ちこれ無上の功徳を具足するなり」

聖人は行巻に「真実の行信を獲れば心に歓喜多きが故に歓喜地と名く」

信巻に「遇浄信を獲ば是の心顚倒せず、是の心虚偽ならず、是を以て極悪深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲るなり」

同、「夫れ真実信楽を按ずるに、信楽に一念あり、一念は斯れ信楽開発の時尅の極促を顕はし、広大難思の慶心を彰すなり」

同、「金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲、乃至七には心多歓喜の益」

文類聚鈔に「常没の凡夫人、願力の廻向によりて真実の功徳を聞き、無上の信心を獲れば、即ち大慶喜を得、不退転地を獲るなり」

一念多念証文に「信心歓喜乃至一念というは、信心は如来の御ちかいをききてうたがうこころなきなり、歓喜というは歓はみをよろこばしむるなり、喜はこころをよろこばしむるなり」

と仰せられてありますが、喜び得ないのは信仰が徹底していないからであります。

こんな立派な金文字が並べてあるのに、自分の信仰の程度の低級さを反省せず、凡智の妄情をもって仏智の不思議を測量し、凡夫は喜べるものではないと平気でおらるるのは、信仰が贋物だからです、信仰が曖昧なからです、摂取されたつもりでいるからです、宿善が厚いと自惚れているからです、実地の求道などは夢にも考えたことが

ないからです、実地の求道をしないから現生不退を知らず、即得往生住不退転を知らず、平生業成も摂取不捨も知らず、開発した大慶喜も知らず、照し出された大懺悔も知らないのです。

それは何故かといえば、二種深心が真似であって徹底していないからです、それは一念の信の体験がないからです、それは仏智が満入していないからです、それは信楽開発していないからです。

二種深心が徹底し、開発したら仏智が満入しているから老少善悪の人を簡ばれず一味平等の歓喜が獲らるるのです。

堕ちる者をお助けという言葉に傷はありませんが、堕ちた苦しさがないから助かった慶びがない、言葉の真似をして死後の往生を描いているのだから痛くもなければ痒くもない、有難くもなければ嬉しくもない、線香花火のようで説教を聞いている時だけの話に終るのです。だからその程度々々の結果を開くから聖人は「化土の業因千差

なるが故に化土の結果も千差なるべし」と仰せられたのであります。

念仏に向いておればみな報土往生を獲ると思っているのだから可愛らしいのです、真仮の分際を説いて聞かしても、信前信後の水際を説明してあげても、今まで聞いたことがないのだから、みな異安心と思っているのです。信前のない人には信後はありません、自力を自力と知らない人には、他力不思議は諦得できません、不了仏智の疑いに悩んだ人でなければ、明信仏智の晴れた天地を知りません。

よく考えてごらんなさい、三百八十余人の僧侶で信の座は、空師と、祖師を除いたら他は三人しか居ないではありませんか。それが信行両座となり、信心一異の浄論となり、体失不体失往生の論争となったのではありませんか。詮じつむれば唯信独達、信一念の極意、心命終はただ聖人一人であったから衆僧の嫉視の的となり、槍玉にあがって破門となり、流罪となる、超勝独妙の境地には誰もついて行かれないから、信一念の邪義じゃ、背師自立の異安心の張本人だと騒がれたのではありませんか。

信仰も合点するのは易いのです、了解するのは易いのです、観念の遊戯をするのは易いのです、法を眺めて有難がるのは（第二十願の桁）易いのです、法話を聞いて感情の涙を流すのは易いのです。

自分の実機が照し出さるることが難しいのです、久遠劫から流転をつづけている衆生本分の機を見るのが至難です、梃子でも動かぬ逆謗の屍が信楽開発することが極難です、極悪最下の機が極善最上の法に摂取さるることが甚難です。

信仰の程度の低い人は、三毒の煩悩は往生の邪魔にならない、死んだらお助けで上等です。信仰の程度の高い人は、逆謗の屍が照し出されて、それと仏智の不思議が一体になって、本願や行者、行者や本願で大満足する境地まで進ましていただくのです。

信仰は本人の程度々々で聞いているのですからみな本当です、四人の盲人が巨象を撫でて、自分の言い分が本当で他人の言ってるのは間違っていると叩き合いをはじめ

たのと同様で、眼開きの人から見たら、四人ともに象の一部分しか知らないので、全体から見ればみな間違いです。法を仰ぐのも、機を突くのも、仏法は無我じゃと離れ過ぎたのも、一念に腰を掛けたのも、仏法の大海から見れば一部分にすぎない。開眼の師から見れば、第十八願の絶対の境地に至る信仰の片鱗にすぎないのです。言葉でなければ導かれないが、言葉を離れなければ不思議の仏智は諦得できません。

法龍は三千世界の果報者であり、十方法界の寵児である。人間世界の毀誉褒貶を度外視して活動さしていただけるのは、無上殊勝の願が無上宝珠の名号となり、私に届いて無上の信心となり、無上の功徳を具足した無上大利を獲さしていただいて、無上の大道を歩ましていただき、無上涅槃を証らしていただくとは最上無上の希有人であり、真の仏弟子とは言葉につくせぬ慶びであります。

二種深心が徹底したとき、仏智が満入し、ただ仏恩の深重に呆れたとき、三仏を生

かし、三部経を諦得し、八万の法蔵を読み破り、大千世界は震動し、十方法界わがものなりの大自覚を得、こんな甚深微妙の二種深心があるとは知らなんだ、かくも鮮かに真仮の分際を明らかに諦得さしていただいたから明信仏智と言えるのだ、見るもの聞くもの悉くが仏法、ただ念仏するより他に道がない、横に貫ぬく光明無量、縦に貫ぬく寿量無量、この十方法界の功徳を全領さしていただいた法龍は無限の慶びであるとともに、無尽の法悦であります。

人世にこんな歓喜があろうとは知らなんだ、人生受生の最大果報者、これを人中の芬陀利華と言わるるのか。諸仏如来と肩を並べ、観音勢至の法友となり、三度の食事は百味の飲食、着ている着物は応報の妙服、住んでいる家は宮殿楼閣、家庭円満、精神的にも物質的にも大福長者、これを光明の広海に浮んだというのだろう。この世の利益きわもなしが正定聚不退の現益、必死滅度の願果を獲るのが当益、真俗二諦、現当二世の幸福を得るとは、唯ではすまされないぞ。聖誕八百年までには大活動をしな

ければならないぞ。

各自が自分の信仰の程度に応じて聖誕八百年の記念事業をなさるのだから誠に結構、万億兆の資金を聚めて報謝をなさるだろうが、それは名号の一滴にも価いしないのだ。法龍は無限絶大の名号を宣布して、報謝の大行を果さしていただこう。

この末代の灯明台に対して、悪罵する人もいるだろう、讃美する人もおらるるだろう、そんな境地があるのなら、ぜひ獲得したいと必死の求道をさるる方もあるだろう。そんな毀誉褒貶はご自分の勝手ですが、そんな不思議の境地があるのかと、ご自分にないので無い方に加擔して、随喜悪をなされば自分の破滅になり、随喜善をなされば自分の果報を増長します。

お読みなさった後には、檀那寺の住職に差上てください、百人の同行が開発するよりも、一寺の住職が開発された方が、宗教は発展します。世の中が逆さまになり、昔は僧侶が知識を選択で同行に説教を聞かしていましたが、今は僧侶が俗人の説教を聞

くようになっています。

私は門内にいてはこんな自由にペンを走らすことはできなかったのに、門外に追放されてから「法界」「入信の道程」「親鸞聖人に聴く」「昭和の歎異鈔」「末代の灯明台」を出版することができ、真宗を側面から発揮することができますのも、仏祖の真意も発揮さすための御方便だと静かに念仏しています。

昭和四四年八月二九日午前三時

非俗非僧　法　龍